

翠球十年史より

「回顧十年」

故 橋本 修三

(一)

時は我々の有為転変には何のかかわり合いも無く、容赦無く過ぎて行き、十年は過去のものとなつて了つた。その過去の深淵に懐旧の小石を投じて耳を傾ければ、定かならぬその底から、微かなしかし懐しい響が伝わつて来、夢の様に過ぎ去つた十年が十年の月日に洗されて、夢よりも鮮かな思い出となつて甦つて来る。思い出を十年の昔に帰せ。十年の追憶の世界に帰れ……。

昭和二十年八月十五日、日本は敗れた。この町角も焼けた。あの界隈も焼野原となつて了つた。焼跡には何も残つて居なかつた。何処迄行つても、何処迄歩いても、只赤茶けた瓦と、焼爛れた鉄屑が続いていた。そして我々の校舎も……過去四年間、毎日の拭掃除で顔が写る程に磨上げられた懐しい校舎。武士道を至高の理念として日々身を滅して國に奉ずる事を鼓吹され、我々の心身鍛錬の場であつた校舎も焼落ちて了つてゐた。そして我々当時の中学生の過去の規範も亦、校舎と共にガラガラと音を立てて瓦壊して了つたのだ。我々は空ろな氣持で辛うじて焼けるのを免れた机を肩にし、蟻の様な行列を作つて海技専門学校、宮川小学校、本山第一小学校へと転々と教場を変えたのだ。その新しい教場で昨日迄受けた教育と信じて疑

わなかつた過去の最高の規範が、今日では全く価値の無いもの、否寧ろ「惡」其物であると再教育されねばならなかつた。かく教える先生も辛かつたろうが、教えられる生徒は新しい抛^{ようどころ}を求めて、徒らに煩悶するだけであつた。もう何も信ずる事は出来なかつた。如何なる権威にも頭を下げる気にはなれなかつた。祖国日本の勝利を信じてペンをハンマーに代え、紙縫^{より}で編まれた戦闘帽を冠り、油まみれの菜ツ葉服を身に纏い、食う物も食わずに、歯を喰いしばつて頑張つた過去の努力が如何に無意味であつた事か。私はあらゆる衝動もあらゆる意欲もその内側から全て去勢されて行く様な気がしてならなかつた。私の心も亦あの赤茶けた焼跡に等しかつた。

その焼跡をさ迷い歩き疲れ果てていた私は、或る日二階の押入れを整理していく意外なものを発見した。それは選手の写真入りで「全国中等学校優勝野球大会」と大書された古新聞であつた。私はそれを手にして少なからざる衝動を受けた。私は小学生時代、暇さえあれば甲子園へ中等野球を見に行つたものだつたが、その情景が、この古新聞を機縁として懐しくも思い出されたのだ。大鉄傘下の大観衆、十万余の巨大な咆哮、真紅の大会旗、そしてあの大会歌のメロディー。それは終戦以来の灰色の生活に射込む一条の光明であつた。この偶然の動機が私をして野球部創設に乗り出させたのである。こうして芦屋の野球部は焼跡の焼木杭の間で孤々の声を擧げる日を待ち設けるが如く、静かにしかし大きく胎動しつつあったのだ。芦屋の野球部は焼木杭の間から芽を出した。べんべん草の様なものだつた。

その年も秋の日が差し始める頃、グラウンドの無い我々は、細か

乍ら松籠鳴り渡る甲陽高專の砂浜の練兵場で、**将又本山第一小学校**

の校庭で「居候」の練習を始めた。しかしそれは運動用具を持って

いるのでも無く、野球の定石を知っている訳でも無く、文字通り草ツ

原の草野球に過ぎなかつた。私としては当時、特別な目的があつて練習していたのではなかつた。唯二年生のうちに、有本・田中・中川・松本と云う将来囁きし得る下級生が既に参加していたので、彼等が最上級生になつた時に活躍して呉れればと、遠い遠い期待を持っていたのだった。

明けて二十一年、忘れもせぬ二月一日、冰雪降る中を鼻の天頂てっぺんを朱に染め乍ら、伝統誇る神戸一中と試合をしたのである。試合に先立ち、一中のマネジャーに、「どうぞ、あちらの更衣室で着替えて

下さい」と云われた時の恥しさ……「いいえ私達は此儘で結構です。実はユニフォームを持っていないのです。それにキャッチャーの用具は何も持つて居ませんので全部お貸し願えませんか。バットとグラブだけは持つて来ました」と苦笑に紛らしつつ答えるを得なかつた。私達は其の時初めて硬式のバットで硬球を打つたのだ。バットを伝わつて球の重味がビーンと掌に響いて来る。痛い。しかしその痛みがたまらない程嬉しかつた。快よい痛みであつた。その試合は4A-1と云う敗戦に終つたが、初めて試合をし得た嬉しさに手を取り合わんばかりに喜んだ。因みにその時のメンバーを茲に紹介して置こう。即ち

越藤本村藤筑本川沢本

森進橋中佐都井中伊有
6 7 3 2 9 4 〃 5 8 1

この試合の結果が校内に報ぜられるや、我々の予期せざる反響があつた。或る者はよくやつたと喜んで呉れた。又或る者は腹が減るのに御苦勞様と皮肉つた。そして最後の血の氣の多いグループは、

我々を校名を穢す異端者として弾劾して日々に罵り喰き、舉句の果は鉄拳を振り上げて喰つてかかる來た。私は残念でならなかつた。私は余りの口惜しさに不覚の涙を堪へる事が出来なかつた。「負けた事が何で恥辱だ。屹度見て居れ。今に見て居れ」と。

(二)

天はうららに日は長閑、敗戦日本にも初めて平和の春が来た。阪急御影の深田池の堤は今を盛りの桜々の花盛りである。その四角な池の堤の一角を通つて急な坂道を七曲八曲に登りつめる事二十分余り、六甲山の中腹にある兵庫師範。そこは我々部員の新しい練習場である。その運動場でお粥腹の空腹を抱え乍ら、馴れぬ硬球をうけて腫れ上つた掌を労わりつつ、曲りなりにも練習を終えて日が西に傾く頃に坂を降る。帰りは運動場から停車場迄の裏街道である。練習に疲れた膝をガクガク云わし乍ら、松林の中の数百の段々小径を駆け下り、路傍の祠には眼も呉れず、ちょろちょろ川の土橋を渡り、松の薪を積み上げたバラックの前を通り過ぎ、小ぢやな水田の畔道を駆抜けて、「紫山」と名付けられた大きな料亭の高い黒板屏をぐ

るりと廻ると、眼前は再び深田池。その池の面を颯と掠める春風に、

時ならぬ雪にまごう花吹雪は柔かな斜陽に映えて殊の外美しい。

「國破れて山河有り」、我々はこの桜に、この常緑の松に慰められ、生氣を取り戻し、新鮮な喜びと明日への希望を与えられて日々の練習に励んだのであった。

しかし、こんな練習を続けるにも幾多の困難が待ち構えていた。

校舎を焼かれた我々は、当時芦屋と、本山の二つの小学校に分散して間借り授業を受けていたので、いざ練習といつてもその連絡をするだけでも容易なことではない。本山第一小学校にいる私から、第二小学校と精道校の下級生に電話で時間を打合せ、そして「山」を登るのだ。しかし練習の隘路はグラウンドと、その坂道だけでは無かった。過ぐる予算会議で他の運動部代表と渡り合って獲得した年額三万二千円也の校友会費も、インフレの当時では正に焼石に水であった。それだから用具には不自由な思いをした。部員の各々が押入の隅から二個出て来た、兄貴の引出しから三個掠めて来たといつて持ち寄ったボールもすぐ破れて了つた。破れたボールは部員が手分けして手縫したが、停電地獄の当時と、帰宅してから夜に縫うということは殆んど不可能に近かった。止むを得ず岡本君等は授業時間中に先生の眼を盗んで、机の下にボールを隠してコソコソと縫っていた。また京都に良いバットがあると聞き込んで急行し、無けなしの予算を割いて辛うじてその十数本を手に入れたが、これを折るやうのなら皆の眼の仇にされねばならなかつた。というのも、乏しい予算もさること乍ら、当時は幾ら金を積んでも、そんじよそない

らの運動具店に良質のバットなんか殆んど見当らなかつたからだ。

そんな状態だったので、今からでは考えられないこと乍ら、一時はボールとバットの損耗が余り激しいので練習が不可能になり、切羽詰って、今後のバッティング練習は水曜日に限ると宣告し、他の日はフィールディングとランニングの練習だけに専念せざるを得なかつた程であった。

それよりも更に不安なことはコーチのないことであった。最近の対抗試合で數度の勝利を得て我乍ら満更でも無いと思いつつも、悲しいかな素人の寄集り、私が主将の責任上、如何に声を嗄して叱咤激励しても、技術的指導や、策戦には手の付けようがなかつた。もう直ぐに予選が始まるういうのに気が気ではなかつた。しかし、この問題は岸本君の尽力により、石田氏（現在、芦高の体育の教官）をコーチとして迎えることが出来て解決した。

初めて石田さんが練習に来られた日、我々はグラウンド迄の裏街道を登ることにした。我々は深田池の堤を左に見て「柴山」の黒塀を廻り、水田の畔を通り、薪の積んであるバラックを睨め乍ら土橋を渡り、相も変らず祠には眼も畏れず、松林の中の階段を息をはずませ乍ら一段々と登つて行つたが、食糧事情の悪い当時、豆粕と芋粥腹と、この暑さでは一息にグラウンドまで登り切ることは出来なかつた。止むを得ずその途中で荒い息使いをしながら、一時腰を据えて了うのが常であった。今日もそこまで来ると、一休みとばかりにペタペタと坐り込んで了つたが、当の石田さんは、我々には何

元気さに一驚し乍ら、周章て、あたふたとその尻を追っかけて行つた。しかし、そんな驚きは序の口に過ぎなかつた。いざ練習となると、バッティングには自らプレートに立つて投げる。フィールディングは「鍛錬」と名付けて一人に五十本以上もシボる。しかもラン

ニングまでも先頭になつて走る。我々は心窓かに「このオッサン一体何を食うんのやろ」と眼を白黒させたものだつた。

それでも初めてコーチを受けた喜びと、そのコーチの口から二流の上と評してもらえた嬉しさに欣喜雀躍。その日の帰り途は、沈まんとする夕日が山影に遮ざられてほの暗くなつた七曲八曲の本道を停車場まで、出来たばかりの校歌を合唱しつつ降りて行つたのであつた。

“夏夕風の芦屋川、螢の光ほの見えて

………… いざ!! 求めん真善美

(三)

焼けつくような炎天下に猛練習は続けられた。一本二四也のアイ

スキヤンディーに渴をいやしつつ、歯を喰いしばつて頑張つた。我々は如何に貧しくとも、如何に苦しくとも、思いの外に明かであつた。兵庫予選に勝ち残り、本大会に出場するということは叶いそうにもない悲願であり、且つは憧憬ですらあつたが、それは案外身近かなもののように思えてならなかつた。我々は自ら意識こそしていなかつたが、「優勝」という一つの可能性を信じていたのかも知れなかつた。それは我々スポーツマンが持つ唯一のロマンティックな夢であつた。

たのだから。

七月二十四日、愈々我々の登龍門たる予選が始まつた。その第一試合の相手は老巧尼崎中学である。その下馬評は次のさる新聞の予想が最も適切に物語つてゐる。即ち

「一回戦中白眉の一戦、尼中に伝統の力あれば、芦屋中は新興の意気に燃え、先日優勝候補明石を10-2（予選前の七月十八日に優勝候補の明石に大勝を博した）という大差で破つてゐる。投手有本の珍しい頭脳的ピッティングは相当高く評価さるべきであり、内外野の充実も有本の好投に酬いる十分なものがあるから、決して尼中も優勢とはいえない。体力に優る尼中としてみれば、力と技の一戦といふべく、一回戦というだけにどうやら“技”に軍配があがりそつと。

果せるかな、この予想は見事適中し、有本の頭脳的ピッティングに森越の好リリーフあり、打つては長短八本の安打を尼中、村上投手（後関学大に進む）に浴びせて大量八点を奪い、8-2の逆点勝をし、正に意氣天を衝くの概があつた。

かくて続く二回戦には、新進機械工業を一蹴し、更には黒馬、灘中学と準々決勝戦において対戦したのである。灘中とはこの春に20A-1で大敗しているだけに、如何にしても雪辱せねばならぬ相手。さればこそ、この一戦と奮起一番、薄暮迫る明石原頭に獅子奮迅、大乱戦の末、日没コールドゲームの15A-12で辛うじて勝利を我がものにし得たのであつた。

その翌日の準決勝戦には、今を時めく中等球界の名門、甲陽中学

を6A-2で降し、愈々決勝戦に駒を進めることになったのである。

す優勝候補随一の関学中学である。

決勝戦を明日に控えたその日、球場からの帰途、有本の家にてスキヤキ・パーティーを開き、我々部員は初めて「緒の釜の飯」を食う機会を得たのであった。我々は今日までの戦勝と、明日に迫った決勝戦の予想に花を咲かせつつ、久方振りの牛肉を鱈腹喰つて大満悦である。私は聊かアルコールの入った岸先生を捉えて「先生先生！！若しもですよ。若しかして……笑ってはいけませんよ。若しも明日勝つて優勝したら、先生どうします」と恰も「お宮」のような質問を発したら「俺の裸踊を見せてやろう」位の返事だと予期していたが思いの外、先生一杯机嫌も手伝つて「合宿さしてやろう」と。それを聞いた一同は、箸を握りしめた儘、「マカシトキーや！」と、もう合宿が出来るかのように大騒ぎをして喜んでいた。

茶碗に呑みつかんばかりの勢で喰っていた私も、流石に食い疲れ、窓につけられた欄干に靠れ乍ら、頭の中を彷彿する様々な幻影を追つて空想に耽つていると、私の横に坐つた浅沼君が「合宿で、こんな氣分かいな」と声を掛けた。私は生返事をし乍ら、折から沈みなんとする夕日を受けて、朱に照らし出された夕焼雲を眺めつゝ一人感傷的な気分に浸つていた。その燃えるような夕焼雲は眼に染みる程美しかつた。私は今日此処まで勝ち残つて来たことに対し「何ものか」に感謝したい氣持で一杯であった。

試合は関学の先攻で開始せられた。試合前に石田さんから注意を

受けた通り、投手の有本は彼の非力を逆用した徹底的超スローボールと、その日の逆風を巧みに活用したアウトドロで、関学の大型打球に相対した。関学のナインは眼前の優勝にいささか固くなりつとも、何のこんな球はトスバッティングぞと、向になつて掛つて来るが、奈何せん有本の球は打者の胸元から急に重力によつてドロップするためには完全に翻弄され、打球の殆んどが三塁ゴロとなつて飛ぶ。芦屋の三塁手は當時としては得難い強肩好捕の森越。その全てを一塁に刺した。回を経るに従い、焦りの見える関学は、何とかして先取点をものにせんものと餓鬼の形相よろしく強振するが、益々この緩曲投法の術中に陥るばかりである。かくて六回裏、森越の左前安打を先頭に三安打を集中して二点を挙げて優位に立ち、更に八回、

(四)

八月一日。今日は愈々決勝戦である。相手は予想通り自他共に許

た。「勝った、勝った。優勝だ」三塁側のスタンドに陣取つて賑れ上

らんばかりの応援団は狂喜乱舞、この開校以来の壯挙に双手を振り上げ、声を張り上げて祝福している。敗戦以来、同じ学校の生徒で

ありながらも、各人各様に自らの穴を掘つてそこに閉籠つていた者達が、今日こそは、この瞬間こそは、その穴から飛び出して、あらゆる感情を感激にまで昇華し、久方振りに手を取り合つて喜んでいたのだ。先生方も在校生も、同窓生も、そしてかつてこの私の頬に鉄拳を喰わした男も、今は何の憚りもなく、優勝旗を手にした私に「橋本!! エエゾ!!」と絶叫しているのだ。

我々の野球の技量は拙いものかも知れない。専門家から見れば恐らく児戯に等しかったであろう。我々のかち得た優勝は、若し運命という言葉を使う事が許されるならば、唯單に球運に恵まれただけかも知れない。野球評論家の眼にはきっとそう映つたであろう。しかしそんな事はどうでもよかった。この優勝が久し振りに新鮮な共通の喜びと感激を齎し、お互に最も純粋な気持で手を握り合う事が出来たのだ。この喜びと感激は、優勝という偶然の成果より余程尊いものではなかろうか。私は十年の月日を経た今日でも、その時の感激と、興奮を忘れる事が出来ない。そして私の前だけかも知れないが、私の友達までが、今もなお彼等半生のうちで最も印象に残っている光景は、この瞬間だといってくれるのである。

この芦屋中学の初出場、初優勝という快挙は何人も予想だにしなかつた事だけに、真底から球界を驚かしたものだった。当時のある雑誌の「弱冠芦屋中学に初の栄冠、全国中等野球兵庫予選を顧る」と題せられた一文は、当時のジャーナリズムの驚きを、この珍妙さ

てれつ奇々怪々なるチームの概要をよく伝えるものとしてここに記載しよう。即ち

「妙なことになったものだ。名もなき芦屋中が、中等野球の本場ともいうべき兵庫県の霸権を握つて全国大会に初登場する。全くもつて思いもかけぬ事で、世の中も変れば變るものながら、どうして芦屋中が霸権を獲得したか。球界の名門、甲陽を倒し、優勝戦でも万人共に評した関学中を見事破つたのであるから、堂々たる戦績ともいい得るし、番狂わせだともいえる。しかし五戦五勝して了つた事は事実で根っからの下手糞チームでは五連勝は出来ない芸当。どこかに優勝するだけのものを持っていたに違いない。芦屋中学は県立て卒業生を二回出したに過ぎない、創立日なお浅い学校だから一般に余り知られていない。——中略——芦屋中もきっとよい所があるに違いないが、今の処の成績だけではその片鱗を見せただけで全貌がつかめない。悪い所だけが目に付くが、予選を通じて見た優勝チーム芦屋中を俎上にのせて、いろいろな角度から解剖して見よう。まずメンバーは

越 本 田 本 沼 岡 沢 川 本 藤 本 村 中 田
森 岡 太 橋 浅 福 伊 中 有 進 岸 中 田 水
三 左 遊 捕 二 右 中 一 投 中 右 捕 三 左

チーム全体から受ける感じは、お上品なお坊ちゃんチーム。天下の名だたるブルジョア街の芦屋市にあるのだから、お人柄は悪かるう筈がない。身体も大きくない。寧ろ小さい方で、捕手で主将の橋

本が飛び抜けで大きいが、投手の有本は三年生というだけにうんと小さく、このバッテリーが並ぶと有本は橋本の肩までしかない。まるで少年野球の投手のようだ。守備もどこといってズバ抜けた名手がいるとは思えないが、小ぢんまりとまとまって頗る手堅い。三塁や遊撃方面も時にはエラーが出るが、かんじんな時にしてやられた一つの原因は大切な時にエラーが出なかつた事にあり、三塁方面によく打たれたが、森越の好守は悉く一塁に刺している。外野も余り特徴がない。攻撃方面では橋本が中心で、彼は強打者というより好打者型。左ボックスで巧みに投球にミートするスウイングは火の出る当たりは少ないとても、安打圏内に綺麗に飛ぶ。五試合 打数19、安打8、打率〇・四二一は何処へ出してもウルサイ存在。対甲陽戦には三安打して、それが何れも得点を稼いでいる。橋本に続いて一番の森越、三番の太田、二番の岡本がある。森越、太田は五試合とも毎試合安打を放ち、優勝戦の対関学中には、いい合せたように打数4のうち安打3を共に放っている。打率は太田〇・三四八で、森越が〇・二七三、岡本は打数が少ないので〇・二八六となつてゐる。しかいすれも上位打者で、五番から後はあんまり振わない。打力にも凄味がなく、守備も平凡、それではどこに特徴があるかといえば、何といつても有本一橋本のバッテリーが異色ある存在を誇つてゐる事を特筆せねばなるまい。有本は小躯白面の非力の投手。恐らく力一杯投げてもあの程度のスピードしか出ないのでだから、四年、五年と大きくなつてスピードが加わると却つて打たれるかも知れないが、今の處ではちょうど打難いノロサを持っている。しかも曲球

にコントロールがあつて、上出来の日にはフワリフワリと本塁ベースかすかに通るストライクとなつて、力一杯打つても飛ばず、ミートしただけでは平凡なゴロとなる始末、関学中や甲陽打陣はこれにすっかり手を焼いて途方に暮れつつ敗れさつたのだから愉快なような話。この緩曲球を得意とするだけに、有本の投球は頭脳的に巧緻なところを見せ、腕で投げるよりも頭で投げているといった方で適当かも知れない。この年少投手をよく補佐するものに人一倍の巨漢橋本捕手がある。珍しい事に橋本は左利きで左捕手というのは稀にしか出て来ないものなのだが、この意味でこのバッテリーは今度の大会にはもてはやされる事であろう。ただ有本投手は年少の悲しさに体力に恵れず、前半は整球力完璧に近い投球を続けるが、後半やコントロールを失い、対関学戦には勢に乗つて九回まで完投して有終の美をなしたが、対尼中戦にしろ、対灘中戦にしろ、対甲陽戦にしろ、何れも七回に乱調に陥つて森越に救援されている。投手としての森越はストライクを投げるだけで何の変てつもないピッチングだから、有本の乱調時における場つなぎ程度のものだ。もし有本が崩れたら惨めな事になりそうだ。こうして優勝チーム若屋中を眺めると、何だか心細い事は事実で、体力において、技量において、堂々と相手チームを圧倒し去る力がないけれども、攻守かなりバランスが取れているから、捨身の精神力が伴えば、甲陽を喰い、関学中を完敗させた力が湧いて来るかも知れないが、何処までも非力のチームで正々堂々と横綱相撲は取れそうにない。奇道に行くべき路を求めるところにこのチームの特徴があることは誰もが認めるだろ

うと思う。——後略——

とこの文の筆者は芦屋中が優勝した事が、如何にも腑に落ちないらしく、なおも首を捻りながら長々と書き続けているが、きりがないので後は割愛する。

(五)

中一日休んで八月三日から合宿が始った。我々は「一緒の釜の飯を食う」という合言葉を日々にしながら、各人各様に夫々の寝具や身廻品を持って、合宿所に指定された本山第一小学校の作法室に集つた。その夜のミーティングで、岸先生から合宿中の練習計画を告げられた。合宿練習とは如何なるものかを知らぬ我々は、一日八時間の練習と聞かされても「そんなものか」と思いながら合宿第一夜の床に就いた。しかし床に就いてからもなかなか寝付かれなかつた。

昨日までの予選大会の光景、優勝した瞬間の欣しそうなナインの顔。狂喜するスタンドの顔々々……。更に来るべき大会の幻想と果しない野望とが折り重なり、それらが次から次へと走馬燈のように脳裏を掠め、縋れに縋れて夜が更ける程に頭が冴え、徒らに寝返りを打つてゐるのだった。

その翌朝、合宿中の練習場である甲南高校のグラウンドに行って見て、これはと驚いた。そこには石田さんは勿論の事、慶應大学の現役選手である松尾さん、本田さん、更には大阪城東商業のコーチの小松さんの姿も見えた。我々はお互に顔を見合して腹の中で「これはシボられるぞ」と観念せざるを得なかつた。果せるかな、その

日から、八月のカッと照りつける太陽の下に昼食を挟む八時間、四人のコーチに怒鳴りつけられ、右に左に振り廻され、練習の終る頃には喉の内側がへばりつき、口から心臓が出そうであった。

最初の十本は元氣に捕つた。次の十本も何とかこなし得た。三十

本目には足が縛れて再三再四トンネルした。四十本目には眼前がク

ラクラし出した。そして五十本目には打球を折角グラブに入れた積りでも握り切れずボロリと落球した。それでもこれから先は精神力で頑張つた。今まで自分が考えていた能力の限界の二倍も三倍も打ち込まれ、そして走らされた。我々は来るべき大会のためと自らを勇気付け、互に励まし合い、かつは慰め合いながら必死にボールを追駆けた。その夜からは予選の思い出も、大会への夢も何もなかつた。床に就いたと思つたらもう次の日の朝だった。

しかし合宿はこんな辛い事ばかりではなかつた。練習の合間に今は今思ひ出しても思わず微苦笑せざるを得ぬような傑作が次々に生れた。コーチの本田さんはフィルティング・プラクティスの時に、よくファイト(Fight)を出せといわれたが、これをホワイトと間違えた四年生のXは「ホワイトて何のこっちゃ」と同級生のYに恥をしのんで尋ねた。ところが彼はいとも簡単に「ホワイトいうたら『白』いうこっちゃないかい。阿呆かい」といつてのけたので、Xはその語勢に押されて訊も解らぬ儘引つて了つた。それからといふものはこの「ホワイト」という芦中製イングリッシュが大流行した。「おい!! もっとホワイト出さんかい!!」と。また失策をした時には

「ドン・マイン(Don't Mind)」という言葉も使われたが、これを

聞いた三年生のZは早速和訳して「どうもない!! 平気々々」とやつてのけた。これなどは正に秀逸の作であつたが、甚だ遺憾な事ながら、このZ君の即興英文和訳には誰も気が付かなかつたらしい。勿論、この聰明なるZ君は「ドン・マイン」という発音を英語として受取つたか、或はその儘「どうもない」という日本語に聞取つたかは、いまだに疑問であるが……。

当時数えて十八歳の喰い盛りであつた私は、空腹の余り毎夕飯は二人前をペロリと平げ、更に松尾コーチの飯を半分頂戴するのが常であつたが、それを見た松尾さんは私に「家で毎晩何杯喰うか」と尋ねられた。私は即座に十三杯と答えた。その日から私はシャリ男という甚だ芳しからざる異名を頂戴した。「シャリ」とは現代語に訳すれば「メシ」という事であり、それはその頃の中学生の流行語であった。

或はまたこんな事もあつた。コーチの石田さんはよく「マカシトケ!! 勝たしたる」といわれたが、それが「マカイトキ!! カタイタル」に聞こえてしようがなかつた。この発音が燎原の火の如く伝播して行つた事は勿論である。

こんな事が日々起つてナインは益々親密になり、そして日一日と一つの目的に凝集して行つたのである。

(六)

敗戦の日より丁度一年目の八月十五日、一年間の苦節に打克つた若々しい意欲を繚乱と花咲かせて、第二十八回全国中等学校優勝野

球大会は劈頭の開会式をもって雄渾なる幕を切つて落した。球場こそ戦前の甲子園から西宮へと変れ、かつての小学生時代賑れ上らんばかりのアルプススタンドの片隅からこの開会式を見て、大きな感慨と共にその小さな胸に一度はこの「場」を踏むことを窺かに期していたことが今此處に実現したのだ。

今日この日のために後援会から贈られた純白のユニフォームを身に纏い、そして同窓会から餞けされた紺の庵の選手帽と、白地に紅三本を染め分けたストッキングを着けて、あの朗々と鳴り響く大会行進曲と共に、これも初陣で四国代表城東中学と仲よく肩を並べて入場したのだ。

塵一つとどめずに清められたダイヤモンド、眼の覚めるような緑の芝生、内外野のスタンドを白一色に埋め尽した大観衆からどよもす拍手と巨大なる鯨波、幼い時からこの大会毎に口号んだ「青雲の棚引く極み、東ゆ西ゆ……」の大会歌。懐しいメロディーだ。眞紅の三角旗が「全国中等学校優勝野球大会」の白の字をくつきりと浮き出してセンター・ポール高く上つて行く。上空には飛行機が乱舞し、数百千の鳩が飛ぶ。紺碧の空に白い雲。私はこの歓喜の詠唱と青春の讃美に興奮の余り陶然としているのだった。

しかしこの喜びもその日行われた第一回戦に脆くも敗退することによつて葬り去られ、悲哀のどん底に叩き落された。四万余の大観衆の歓呼と咆哮を背に受け乍ら、初陣の初勝名乗りを上げんものと必死に戦つたが、守つては二本の本塁打を打たれ、且つは九個の失策を重ね、攻めては城東中学の前田投手（後に慶應大、現日本ビ）

ル)に九個の三振を奪われ、結果は6-2という惨憺たる敗北であった。

敗北の原因は無数に考えられた。球運に恵まれなかつたといえよう。合宿の練習の疲労が出て来たともいえるだろう。勝利というものを意識し過ぎて固くなつたとも考えられた。将た大観衆に氣を呑まれてアガついていたとも思われた。或いは又、予選の大勝に気が奢っていたのかも知れなかつた。又或る人は調子が悪かつたのだと簡単に結論を下していた。そしてそのどれもが、或はその全てが当つていたのかも知れなかつたが、最大の原因是地力に乏しかつたことだつた。

敗北は一つのエポックを作る。勝負の世界における敗北は己の実力を痛切に覺らしめるが故に偉大である。陶然と酔つている者が卒然として眼を覚し、巫山戯^{ふしき}た男が慄然として襟を正し、奢り高ぶつた者が肅然として反省して身の程を弁えるようになり、誠らず識らずの中に他を偽り自らをも偽つていたものが判然と自分の本性を知るが故に偉大である。そして悲嘆のどん底から新たな勇気を、奮然たる決心を与えるが故に偉大である。その人の受け取り方次第で、敗北は一つのエポックとなり得るが故に最も偉大である。

我々はその敗北が故に発憤し捲土重來を期して猛練習を続けた。そして金沢遠征の時には、地元金沢中学に大勝を博し、中京の雄、

享栄商業には敗れたりとはいえ善戦し、觀衆から我々のそのグラウンド・マナーとチーム・ワークとそして最後まで試合を捨てぬ闘志が故に絶賛を浴び「また来いよ」と励まされ、温い拍手に送られて

その地を去つたのである。

更にその秋の県下総合体育大会では、洲本中学、神戸二中、及び神戸一中を降して再び県下球界に覇を唱え得たのである。

その時は在校生の殆んど全部が一つの応援旗の下に心を一つにして手を振り帽を翳して声を限りに歌い叫び、心からなる声援を送つて呉れた。校舎を焼かれ、その再建の目途も着かず、廃校寸前にまで追いやられていても、自分が芦中生であることを誇らしげに、そしてこの野球部を持つことを誇るかの如くに……。

この愛校心が諸先生方の献身的な御努力と相俟つて、その後の校舎問題解決の糸口となつたのである。

こうして我々は五年間の思い出を籠めて芦中の校門を去つたのである。校門といつても仮校舎の裏に、竹で編んだ身窄らしい裏門であつたけれども……。

芦中健児の安らぎ

夢路に通う新日本

(七)

我々五年生が卒業した後は太田、有本等の旧部員に、柳井、堀、荒石、等が新たに加わつて新チームを作り、二回目の夏の予選大会を迎えたのである。

この年は投手の有本も二年目のこととて可成りの上達を示し、打球も福岡、中川、有本、太田、荒石、と好打者を揃えて相当の充実を見せたので、戦前の下馬評も優勝候補と謳い、我々も亦連續優勝

をと心切かに北叟笑んでいたが、結果は案に相違し、予選に入ると

同時に有本は突然乱調に陥つて毎試合大量得点を許し、その都度、中川、松原等の好打で危機を乗り越えたが、準決勝戦において当時の

伏兵三田中学に6-3と敗れ、連続優勝の夢は水泡に帰して了つたのである。

かくてその年も暮なんとする頃、球界の先輩滝野氏（往年の法政大の名一墨手、現セントラル・リーグ審判）を監督に仰ぎ、不調の有本を遊撃に廻し、荒石、伊沢の両選手を投手として鋭意チームの強化に努力したが、如何せん結果は却つて悪く、黒星を重ねていった。

明けて二十三年の一月、私はコーチとしてナインと共に和歌山遠征の機会を得た。この遠征は惨敗を重ねて意氣銷沈しているナインの心氣を一転するためにも、将又有本の投手カムバックを成功に導くためにも是非とも勝ちたい試合であった。しかも相手は中等球界切つての名門である和歌山中学と海草中学である。

新和歌之浦の宿所に着いたその夜、明日の試合に備えて先に寝かした選手達は、途中の車中の疲れも手伝つてか泥のように寝込んでいた無邪気な寝息を立てていた。隣の部屋では我々に同行して來た伊丹中学の選手達が喋々喋々と話し合い、時々五六人の囂み殺せなくなつた笑い声が深夜の暗闇に響いていた。私は遠征の興奮に眠られぬ儘に冷々とした煎餅蒲団に潜り込み、夜の更け行くのも忘れて明日の策を練らしていた。コーチの責任上如何にしても勝ちたいと思、そして選手に自信を取り戻さすようには何としても勝たねばな

らぬと思う。しかし具体的な勝利への策などあらう苦もなく徒らに氣苦労を重ねるだけであつた。

幾時間経つたであろう。ガラス戸越の夜の空が仄々と白み始める頃、出漁に向うのか帰港するのか判然とせぬがシンと冷え切つた外気を震わして、漁船の機関の僅かな響が海を渡つて伝わつて来る。

私は一人床を抜け出してつい眼の前の防潮堤の上に上つて見れば、その時恰も湾内一面に立籠る朝靄を突いて真赤な太陽が真正面からのっと大きな顔を出した。この朝日に照し出された水面は見る間に橙紅色に輝き、黄金色に変じ、艤ては靄も払うが如くに払われて夜目には想像も出来ない新和歌之浦の全景を現わし始めた。この雄大な日の出に私は力強い勇氣と純粋な喜びを与えられた。そして昨夜來の腐心の策も、今日の午後に迫つた試合も今は取るに足らない些細な「出来事」のように思われてならなかつた。私は唯無心に虚心坦懐に試合をすれば良いのだと思つた。

この遠征の一試合はバックの好守に支えられた有本の好投と、松本、有本、中川、田中の適時安打により、和中を6-4に破り、更にその翌日伊沢投手（後に西村と改名、阪神タイガースに入団）を擁する海草を1A-0に屠り、再び球界に芦屋の存在を示したのであつた。

有本も見事にカムバックした。中川、田中の二遊間も綺麗たる守備振りを示した。そして線香花火のような打線も漸く本格的な当たりを見せ始めた。そのことよりもこのチームの品格と節度に対し観客と関係者から賞賛されたことは私には何よりも嬉しかつた。この遠

征は私の短い野球生活の中で最も印象に残る一駒である。

この年に中等学校は高等学校と改名昇格し、夏の予選は参加校六十四という記録的な出場校を数えて開催せられた。滝野コーチが都市対抗野球大会に出場のため、私はこの予選中に留守を預ることになつた。

一回戦は市立第一機工を7-10と一蹴し、二回戦は灘高校を鎧袖一触6-1に屠り、三回戦には新進気鋭の鳴尾高校を1A-10と苦戦乍らも破り、準々決勝には黒馬尼崎高を2-10と倒し、続く準決勝に宿敵三田高校と対戦し、延々十七回の末、木下の左越安打と有本の適時打で2-1と辛うじて一矢を報い、その翌日の決勝戦に神戸二高（後に兵庫高校と改名）と争い、六回味方の内野陣の混乱から一時は3-2とアヘッドされたが、八回、松本の安打に好機をつかみ、田中の絶好のスクイズ等で三点を奪い、その儘押切って再び優勝の栄冠を勝ち得たのである。

かくて甲子園原頭に駒を進め大会劈頭の八月十三日、紀和代表桐蔭高校（海草、和中、及び和商の三校が発展的解消して作られた新設校）と対戦することになった。当時怪童の綽名で呼ばれていた桐蔭の西村投手（元海草中の伊沢が改名）の左腕から真向微塵と投下する剛速球を芦高ナインは良く選んで四点を挙げたが奈何せん桐蔭の超高校級打線に二回に五点を先行され、更に九回ダメ押しの一点を追加され遂に6-4と一回戦で敗退せねばならなかつた。

私はこの試合コーチの任を滝野氏にお返しして、スタンンドの片隅で大観衆の一人として一喜一憂のうちに観戦していたが、六回の反

撃で中川が右中間に殊勲打を放った時には、「珍しや！」ガリンがヒット打ちよつた」と嬉しさの余り、手にした扇子で一緒に見ていた岡本君や、見知らぬ隣のオッサン連の頭を何の見境も無く撲りつけて喜んでいた。しかし回が進むにつれて敗色が明かになつてからは、恰も自分の船が沈んで行くのを岸から眺めているかの如く、唯呆然と肩を落して敗けて行く姿を看守つていた。この一年間、この日の為にあらゆる犠牲を耐え忍んで励んで来た苦勞が、かくも脆く潰え去るものであろうか。私は悲しいと云うよりも寧ろ淋しかつた。それは何か大きな力に見放され突放された時の様なやり切れない淋しさであった。

選手達も、今朝迄朗かに口号んでいた「雲は湧き、光溢れて……」の新しい大会歌も、今は誰一人口にするものは無く、悲しみに耐えるが如く一言も嘆らず黙然と頭を垂れて合宿に帰つて行くのであつた。

(八)

昭和二十四年の春、芦高野球部は初めて春の選抜大会に出場する機会に恵まれた。過去二回の大会には有力出場候補に上りながらも惜しくも選考洩れとなり、その都度補欠校という歯痒い立場に甘んじていたので、今回の出場決定には手を取り合つて喜んだ。

かくて大会初日の四月一日、しかもその第一試合に慶應二高と対戦し、九回表迄6-3と大きくりードされながらも、その裏の一死満塁の土壇場に木下の右前テキサス安打で、慶應ナイン呆然とする

うちに走者を一掃して幸運な勝利を得た。続く準々決勝には大阪の

雄、大鉄高校と戦い、好投手網（後に関西大、現大阪電電公社）に八回まで完封されながらも、田中の幸運な右前安打で二者を還し、大鉄の九回裏の猛追を薄氷を踏む思いながらも断切り、2-0と辛勝し、準決勝には当代唯一の名投手と謳われた福島（後に早稲田大卒、現八幡製鉄）を擁する小倉高校には、田中、木下がまたまた右翼方面に快打して福島を攻略し、戦前の予想を完全に覆して4-0と完勝した。

過去の三試合に芦屋の打陣が再三再四右翼方面に幸運なる安打を放ち、しかもその悉くが決定打となつたので、世の口賛なる悪たれ連中は嘴を揃えて、右翼前を「芦屋高校のラッキー・ゾーン」と評した。蓋しこれは名言である。

かくて優勝戦はこれも球運に恵まれて勝進んで来た大阪の北野高校と対戦することになった。試合の前半は有本も北野の多湖（後に慶應大卒・現鐘紡）も互に敵に乘ずる隙を与える、息詰まるような投手戦を展開した。七回表北野は多湖の二塁打を足場に一点を先取して均衡を破り、さらに八回再度多湖の殊勳打で一点を追加し、ダメ押しかと思わせたが、その裏芦屋は木下がまたまた右前に快打するや俄然活氣を取り戻し、水田の右前安打と福岡の起死回生の中安打で二点を還して同点として延長戦に持ち込んだ。そして十回表中

堅手荒石の後逸と多湖の三度目の殊勳打で北野に再び二点を献じたが、その裏得意の粘りで二点を挽回して再び同点に持ち込み、さらに勝越すべき一死満塁の絶好の好機を迎えた。次打者石田の一打は快

音を残して左翼へ飛んだ。ヒットかと思った瞬間敵もさるもの颶と差し出すグラブに白球は鮮やかに吸取られた。しかし右に走つたのでバックホームするには甚だむづかしい体勢だ。それを見た三塁走者の田中は猛然と本塁に滑り込んだ。球は返球されない。セーフだ。勝った。優勝だ！！……と思いつきや、恨むべし二塁走者の木下がこの痛烈な当りに釣られて飛び出していた。それを覚った左翼手は本塁には眼も呉れず、二塁塁上に送球して田中が本塁を踏むより一瞬早く併殺が成立した。この木下の凡プレーで可惜優勝の好機を逸して了つたのである。かくして十二回に更に二点を奪われ、刀折れ矢尽きて、紫紺の大旗を眼前にしながら敗れ去つたのである。

しかし優勝を逸したもの、有本、田中には最優秀選手賞を、木下には生還打賞を贈られ、彼等に自信を与えたことは大きな收穫であった。そして彼等に残された最後の大会である夏の大会に備えて球界の大先輩である浜崎氏（慶應大卒・現パシフィック・リーグ審判員）を監督に迎え、新しく出来たばかりの我々の運動場で猛練習に励んだのである。そして從来の守備のチームより打撃の芦屋へと大きく変貌し、名実共に具わった強豪チームになりつつあつたのである。

因みに当時のメンバーをここに紹介すれば、

中	下	岡	本	石	川	田	坊	田	本
5	3	2	1	8	6	9	7	4	

この年の夏の予選は、山本（後に慶應大・現鐘淵化学）－大津

うとしているのだ。

（後に関西大・現日本生命）のバッテリーを持つ明石高校に苦戦をしたのみで騎虎の勢で勝進み、決勝戦の尼崎工高には9-0と一方的に快勝して三度目の覇権を獲得し、全国大会において三岐代表瑞陵高校の徳永（現中日ドラゴンズ）を打込んで9-0と大勝を博し、二回戦にも山静代表静岡城内高校を6A-3で撃破し、正に優勝候補の貫禄充分の勝ち振りだった。かくして準々決勝に四国代表高松一高と対戦したが、頼む有本が二回と三回に中西（現西鉄ライオンズ）、山下（現阪急ブレーブス）等の集中打を浴び、好調の打陣も打球の殆んどを好捕され5A-0と敢無くも零敗を喫したのであった。

戦に敗れたその日、合宿では荒石や福岡等の選手達が、薄穢い畠に寝転りながら、今日の試合の一齣々々を思い出しては嗤笑っていた。彼等は天井の白い白い壁を仰いで、それ以上に白々しい空虚な爆笑を以てこの悲哀を追払い、一刻も早く時間の過ぎて行くのを願つてゐるのであつた。その空虚な爆笑は、今日の敗北に敢えなくも潰え去つた四年間の夢に捧げる挽歌でもあつたのだ。

創部以来四年間彼等は実によくやつた。私達第一回の部員が卒業して以後の僅か三年の間に、兵庫県下の大会に優勝する事四回、準優勝二回、近畿大会には優勝、準優勝各々一回。しかして全国大会出場は、夏二回、春一回、秋の国体一回、という輝かしい成果が雄弁に物語つてゐる。しかし夢にまで描いた緋の大旆は遂に手にする事なしに卒業してしまつたのだ。私の最も信頼していた選手達は去ろ

この三年間、私は大学の野球部にありながら暇を見ては彼等と一緒に練習し、苦労と共ににして來たので、彼等との思い出は尽きない。

かの春の大会の決勝戦に中堅手の荒石が、再度も大きなトンネルを

してかして、外野の塀まで駄馬の早駆のような恰好で走つてゐる哀れな姿。かつては打数六十二、三振三十一と三振率五割を誇つた中

川が、何のお力添えか、どう開眼したかは判然せぬが、夏の大会で

三百九十九に垂んとする大三塁打をカツ飛ばした時の嬉しそうな顔。

また滝野コーチが水田の親父さんとは知らずにその面前で、息子である水田のボン・ヘッドを味噌糞に貶した時の親父さんの複雑にして奇怪なる顔付。そして滝野さんが後で気が付いた時の周章振り（後聞に従えば、その晩当の水田は飯を喰わしてもらえなかつたそ

うだ）また尾籠な話で恐縮な事ながら、福岡が「この便所は『お釣

り』が返つて来る」とい出し、初めは何の事だか誰も判らなかつたが、漸くその“お釣り”的意味する処が判るに及び、予め膝の屈伸の準備運動をしてから用を足しに行つた事。或は合宿にて寝付けぬ夜、果てなしの暗闇に響く屁の音に失笑を洩し、或はまた月の

明るい夜睡られぬ儘に蚊帳を脱け出し一人瞑想に耽つてゐる時、所処は定かならぬが「何しとんね。走らんかい！」の寝言に月の世界を走つていた心が急転直下合宿の窓に呼び戻され、思わず微笑を洩らした事もあつた。

これら彼等と共にした喜怒哀樂の一つ一つが、感傷のヴェールを伴つて思い出されて來るのである。

彼等が芦高を卒業すると同時に、私は学窓を去り社会人となつたので、それ以後殆んど練習にも出られず、試合も見に行かなかつた。というよりも気抜けがして見る気がしなかつたのかも知れない。

しかし部員は新たに赴任された古家コー（平安中学黄金時代の

遊撃手）を中心として練習に励み、昭和二十五年の夏の予選

には準々決勝で兵庫高校に敗れはしたが、その翌年の二十六年夏の

大会には芦高として四度目の出場する機会を得たのである。当時の

大会の模様は次に記する「球心拌借」と題せられた芦高新聞の一節

がその一面を物語つている。即ち、

◎大腹ゆすぶつて大号一声“芦高頑張れ”的声援、扇の打ち振りよろしく、まずは陣頭指揮の校長が炎天下のスタンドに厳然たり。

予選大会を通じての熱心さに一同囁然感心、自治会応援団も走る幌馬車を追駆ける態であつた。

◎芦高名物数々あれど、名物中の名物は三々七拍子か知らねども、汗水たらした応援団諸氏も、灘の生一本ならぬ、並んだ駄町の酒樽応援の乱調子に一寸眼を見はり、“誰に見せる応援じや”“男女共

学でさっぱり声が出ないぞ”の芦高狂ファンのスタンドの罵声如何にお聞きじや。尤もこれらの種族には案外懷古趣味者が多い事必定だが……。

◎それでも小倉に勝った時（註）大会一回戦小倉高に7-1で快勝）は気持がよかつた。全員安打、ホームラン（註）杉谷が左翼ラッ

キー・ゾーンに三百二十呎のホームランを打った）の快挙は主力打者二名欠場（註）湯本、土河両選手足首捻挫のため欠場）の心配を吹飛ばして、“野球は九人でやるものじゃない”といわれて科学野球を標榜しておられる監督さん以下、いわゆるチーム・ワークの勝利か。意氣投合の賜か。とに角一度に優勝候補にのし上げた。

◎対長崎西高戦（註）第二回戦5A-4の逆転勝）の興行価値満点。あの打棄りが所謂芦高精神か。

◎予選を通じて三振七十二個の高校ボップフェラー剛球投手も連日の疲れか、この日（註）準々決勝高松一高に6-2で敗る）は出来が悪かつた。予選を無事通過出来たのも、君に負う所が大であったのだから非難は当らぬが、人間とかくガタストロフに直面すると脆さを暴露するもの。丁度古びた家の雨漏を直すようなものだったとは“陰の声”。

◎甲子園なる檜舞台で芦高という校名と共に善戦これ努めた野球部諸君にまず讃辞を送らねばならぬ。経済的バックを作つて下さった後援会の人々に感謝せねばならぬ。連日選手の一擧手一投足を看守ってくれた応援の諸兄姉と共に戦つた事を多とせねばならぬ。野球部も学校と共に、大衆の中に生きているということ。

◎盛者必衰の事。戦は常に自己の心の中にある事。精神力の敗退は何物にも換え難きこと。それを養成すべき過程は日々の生活の中にあること。悩みを体験した悲壯からの出発でなければ大成せぬこと。等に筆者は先輩Hと共に八月十七日の夜遅くまで語り合つた事だつた。単に野球部の問題だけではなく……と。

その年の秋に、野球部は国体に出場して優勝戦まで進み、更にその翌年の二十七年の春には選抜大会に出場し、芦高野球部は、新銳より名門と呼ばれるようになり、高校球界に不動の地位を確保しつつあったのである。

かくて三年の月日は流れ、二十七年の夏、古家コーチの辞任に伴い、野球を忘れかけた私にコーチという重責が廻って来た。

野球を止めてから三年間という空白と当時の野球部の在り方にに対する私の偏見は、どうしてもこの重責を引受けける気にはさせなかつた。しかし校長先生、部長先生、その他野球部関係者の御要請に、私は漸く自らの非を悟つた。歳月に磨かれて美化された自分の持つてゐる過去の夢を壊されまいとして小さく守り、その夢の中に閉籠ろうとしたのは明かに私の誤謬であった。自分の過去の殻に閉籠り過去の追想に耽りながら、時たま現役野球部の方を見やつては不平の泡を吹き上げるのは、屁の突張りにもならぬ老耄爺のする御役目である。「近頃の者達は……」等と頑固親父みたような事をいつていたのでは益々退屈的になるばかりである。私は彼等部員にもっともつと積極的に、創部當時我々が抱いていた氣魄と闘志と飽くなき野望を鼓吹すべきである事を悟つたのだ。

私はその日から私自身が最初から出直す積りで練習に参加し、夜は理論と新しいルールの研究に専心した。私の最も懸念した事は選手の技量ではなかつた。それよりは、今年こそはという後援者の異常なる期待と、優勝候補随一という輿望が、彼等選手達の精神的な過重となりはしないか。将又それと反対に、唯單に声望のみをかち

得ん事に汲々たる人氣者に堕落させはしまいかという事であった。

しかしそれ等は単なる懸念に終り、予選大会は後輩の石田の協力を得て兵庫代表たるに適わしい勝つ振りで優勝し、愈々全国大会を迎えたのである。

予選中半から的好調の波は崩れてはいなかつた。一回戦は山形南高を大差をあけて一蹴し、二回戦には新宮高の杉本（現明治大）を鋭く攻めて2-0と降し、準々決勝には柳井商工と対戦して2-0で勝利を得、更に準決勝戦、南関東の雄、穴沢（現明治大）を擁する成田高校の機先を制して3-0に屠り、破竹の勢いで優勝戦に臨んだ。

夏の盛り八月二十日。漠々たる灰色の積雲が急がしく西から東に流れ、湿気を帯びた生温い一陣の風を受けて合宿の前栽に茂る夏草が一度に右から左に颶と靡いた。と次の瞬間、ポツリと屋根を打つ音と共に数条の白い筋が斜めに走つた。「チエッ!! 雨か」この雨が今まで持ち続けて来た精神的均衡を破り、この日この試合に波瀾を捲き起すかのようで不安でならなかつた。さりとてこの雨で試合が一日でも延びる事は選手の肉体的過労を軽減するかも知れないが、反面これ以上精神的緊張を持続する事は最早、限界が來ているようと思われた。私は選手と共にこの不安を振切るかのように雨を衝て甲子園に向つた。

晴れるかと見せて降り、降ると思わせて雲を切るこの空模様には、試合は定刻を過ぎる事一時間、水を掃き軟弱な地盤に砂を盛つて漸くプレー・ボールが宣せられた。優勝戦は独特の雰囲気を醸し出す。

しかも兵庫代表のわが校に対するは大阪代表の八尾高校と、過去三十九回の本大会においても初めて顔を合わす地元同志の対戦とあってと左右両翼のスタンドに陣取る両校の応援団を始め球場を埋め尽くす大観衆はドッと鬨を合せた。過去の四試合にはかなりの余裕ある態度を示していた選手も興奮に顔を硬ばらせている。

一回表、四番打者石本は左翼に快打を放ち、一点をものにした。それも束の間、安堵の闇もあらばこそ、その裏八尾の必死の攻撃に忽ち一点を返され、私の懸念は事実となつて眼前に現れた。

無為に終る攻撃を重ねれば追われる者の弱身として浮足立つて迎えたのは五回裏の「無死満塁」。十有数万の興奮は右に左に大きく渦を打った。守るナインは寂として声なし。かの怪腕を謳われた植村も未だ未だ若い高校生だ。事ここに到つては精神的動搖は掩うべくもない。私は忠告と激励のタオルを持った伝令をマウンドに送つた。植村はベンチを見てコクリと点頭いた。期待と不安の交錯する中に彼は懸命に投げた。一塁ゴロだ。何時もならこの辺でボロを出す増田が事もなげに球を掬つて走者を本塁に封殺した。漸く一死。

次打者は八尾切つての好打者元橋（現早稲田大）がバッター・ボックスに入った。第一球ボール。とその時何を勘違いをしたか二塁走者が大きく離塁した。何でこれを見逃そう。捕手の石本は好球を遊撃に送り、走者を一・三塁間に挟殺して辛うじて二死を得た。しかしベンチはなおも続く。元橋は選んで一塁に歩き再び満塁。しかも打者は五番強打の木村（現早稲田大主戦投手）である。カウント一・二の後外角球を打つた。天晴れなスウイングと共に打球は水を含ん

だ地盤を這つて痛烈に二塁の左を襲つた。本屋敷が左に走つた。抜かれるか。南無三ノリ……その時私は不覚にも眼をつむつて了つたので後は解らなかつた。三塁側応援団のドッと拳がる喚声に漸く危機を脱した事を知つた。石本がホッとしたような面持で突立つてゐる。植村が隠し切れない喜びに白い歯を見せてゐる。堀口がニタニタ顔で大股に走つて来る。土河が猛烈な勢いでベンチに駆込んで來る。よく頑張つた。よく防ぎ止めた。これからだ。悄然として八尾のナインがポジションに散つた。ここに彼我の形勢が正に逆転した。

凝雲の隙間を縫つて薄陽が射込み雨に濡れた緑の芝生がキラリと輝いた。迎えて七回表、町田のセーフティーバント。西川の内野安打。本屋敷のヒット・エンド・ランと渋く稼いで一死満塁という絶好の好機が到来した。しかも打者は当りに馬鹿の付いた土河である。このベンチに腐る木村がカウント二・〇を取つて稍々気を持ち直して投じた一球は、カーンと四次元の快音を残し、鮮かな二次曲線を描いてグングン延びて行く。左翼手が脊走しながら颶とグラブを挙げた。捕られるかと疑つたその瞬間、打球はグンと延びて野手の頭上を見事に越した。町田が還る。西川が勇躍として本塁を踏む。本屋敷が欣喜雀躍として滑り込む。一挙三點。スタンドは万雷の拍手と観衆の波が揺れている。

かくて我々は勝つた。遂に宿望の全国優勝を遂げ得たのだ。閉会式。「勇士は還りぬ」の讃歌を美しく奏でる吹奏楽と共に、主将石本は三十有余年の球史を秘める大旆を手にしたのだ。七年は長かつた。実際に遠しかつた。この七年間我々はこの縛の大旆を手にする

日を千秋の思いで待っていたのだ。三年前、その一步手前で宿望を

遮られた時には全国制覇の機会はもう一度と訪れて来ないような不吉な予感さえした。この宿望、否寧ろ悲願でさえあつた優勝が今こ

こに叶えられたのだ。喜ばずにはおられない。天に向つて絶叫せずにはおられない。私は興奮を沈めるために静かに眼を閉じて見た。

私の学生時代。勉学に専念精神的成长に私を指導し啓蒙して下さった諸先生方。野球を一から教え込み心身を練磨して下さった球界の諸先輩。この七年間、野球部のために只管後援を惜しまれなかつた方々。あのスタンドを埋め、この沿道に手を振り、小旗を翳して選手を迎える数十万の声援者。また、今ここでは声こそ聴かね、顔こそ見えぬ、幾十幾百万のファン。更にはまた、私と苦労を共にした同輩、後輩のこの顔、あの顔、顔々々。全ての顔がこの日この試合そしてこの栄冠に心からなる祝福を送つてくれているのだ。

私はこの瞳裏に去來するこの顔の一つ一つに感謝せずにすむおられなかつた。そしてまたコーチとしての責任を果し得、先輩としての義務の一半を尽し得た事に対し、この端無き無神論者も神とこそいわれぬが「大いなる無形の力」に我知らず合掌せざるを得なかつた。前を行く朝日新聞のボリーカーが我々の優勝を大声で沿道の人々に告げている。我々の後のトラックに乗つた応援団は校歌を合唱している。選手は手に手に「祝優勝」と朱書された小旗を振つている。私はこの無邪気な選手の姿に自ら眼頭が熱くなつて来るのであった。

沿道の人の中からも校歌が聞こえて来る。

“春曙の打出浜”

……つくよ時代を告ぐる鐘”

(十)

十年一昔とはよくいったものだ……。

私の中学生時代、当時の小学校の湊垂小僧連が我々を抱えては「芦屋中学仮校舎、机に靠れて虱取り」といつて嘲弄したものだつた。また私と同期生で天才児の誉高かつたI君は四年から三高を受験して見事首席で合格したが、その時の試験官は芦中の存在を知らず、しかもその名も無き新設校に彼のような英才がいるのを訝つたそうである。彼はこのやる方なき忿懣を私に向つてぶちまけていた。それ程芦屋中学とは世間には知られていない小っぽけな存在であつたのだ。それがその一年後に再び彼に会つた時には「野球部が大会に出場してくれたので胸を張つて歩ける」と彼は晴れやかに語つてくれたのだ。私はその言葉が今以て忘れられない。そして十年後の今日は誰知らぬ人はない高校界切つての名門校と呼ばれる程まで成長したのだ。私は若し他人から卒業した中学校の名を聞かれたら「芦屋中学」と何の躊躇も何の注釈をも付け加えずに答えるだろう。この私の返答に注釈を要するような野郎は世間知らずだと私は思つている。現在の在校生諸君もまた私と同じようなプライドを持つてゐるに違ひない。

ここまで成長するには決して一朝一夕になつたものではない。最

短距離を歩んだ積りでも十年という歳月を要しているのだ。しかもこの十年の一日々には血の滲むような尊い努力が払われているのだ。その努力の蓄積が今日の成果を齎したである。

最近の在校生諸君は私の前だけかも知れないが一言目には「伝統を守る」という。しかしこんな空念仏を唱えるだけでは何一つ解決されない。「開けゴマ!」といっただけでは窄き門はさらさら開かれないと、いつでもここに述べた創部当時と同じように練習場を借り歩けとか授業中にボールを縫えと御説教をする気は毛頭ない。立派な練習場が教場の真横にあるからにはそこで練習した方が能率的だし、ボールも手で縫う事自体が決して立派な行為だとはいえない。

私のいわんとするのはそんな些細な事ではなくて、私達創部当時の部員が等しく胸に抱いていた闘志と気魄である。何事も進んでやり抜かんとする積極その物の意欲だ。可能性を無限にまで広げんとする飽くなき野心だ。これこそ、この精神こそ「伝統」と呼ばれかつ受け継がるべきものであり、「芦高精神」と名付けられるものではないのだろうか。

芦高も開校以来十五年、野球部も創部十周年を迎える、一応発展の一過程を終え、動^やもすれば意氣消沈し勝ちな中期と呼ばれる時期に入った。この時に今一度開校当時、創部当時の精神を反省して見る事も強ち無意味ではないだろう。

「若さは熱と意氣であり、顧而後の微笑である」私は十年前の中学時代を今ここに顧て、微笑を禁じ得ない。そして時には色の変つて了つた写真に見入りながら、ここにAがいるそこにBがおるといつ

て昔話に花を咲かせ、或は毎朝の通勤車中で新聞の運動欄に眼を通して忘れた頃に来る寄附勧誘の用紙に見入っては、痛し痒しの微苦笑を洩らしつつ財布の底をはたくしがない一先輩である。このようないくつかの私を、更に十年後には再び馥郁たる微笑を以て諸君と語り合えるようになれるならばと心窓かに急願しているのである。お互に顧て微笑し得るような日々の生活を送ろうではないか。何も恋愛だけが薔薇色の人生ではない筈だ。

(完)